

まちの財産

昭和の名建築が、土ぼこりとともに消えていく。

歴史的建造物の保存に取り組む清水彬久さん(67)＝芦屋市＝は、6年前のことを今も鮮明に覚えている。

旧室谷邸は米国の建築家ウィリアム・メレル・ヴォーリズが設計した個人邸宅の代表作だった。ところが、現状保存を条件に買い取った不動産会社が、「倒壊の危険がある」として一転、取り壊しを決めた。建物の変更に許可が必要な文化財指定を受けておらず、れんが造りの美しい洋館が解体されるのを、ただ見守るしかなかった。

阪神・淡路大震災後、壊滅的な被害を受けた神戸の景観を守ろうと、定年を3年残して会社を辞め、NPO法人「アムニティ2000協会」を立ち上げた。市民から資金を募る「ナショナル・トラスト方式」で建物を買い取り、活用する。そんな理想を追い求めていたとき、室谷邸を失った。

異人館はいま 保存と解体のはざままで

5

保護を支える感覚育む

「守ることができた建物は、い」
片手で数えられるほどしかない。その後、同じくヴォーリズ



ヴォーリズ設計の六甲山荘を見学する親子と、案内するボランティア＝灘区六甲山町

設計の六甲山荘(灘区六甲山町)を買い取り、解体の危機から救ったが、守れなかった悔しさは、とげのように突き刺さる。

京都工芸繊維大学院助教(近代建築史)の笠原一人さんは「近代建築物に対する関心が低いことが、保護を難しくしている」と話す。文化財指定に所有者の同意が必要なのも保存の壁になるという。

4月から11月まで、週末ごとに開かれる六甲山荘の見学会。ヴォーリズファンを清水さんらが案内し、随所に施された意匠を説明しながら保存の意義を伝える。

「山荘は市民みんなの財産。その感覚を分かってもらえれば、残せる建物も増えてくる」
建造物保護を支える感覚を育むため、清水さんたちの地道な活動が続く。＝おわり＝
この連載は小西隆久が担当しました。